

一遍上人が歩いた道

八柳 修之

時宗の開祖、一遍上人は生涯念仏を唱え歩き続けた。元祖、生涯ウォーカーともいえる。

時宗の本山、藤沢の遊行寺、藤沢に住むものとして知っておいてもよいと思い調べてみた。



時宗は700年もの昔、一遍上人が開いた念仏宗である。中国唐の時代に善導大師が念仏の教えを盛にした。鎌倉時代になって法然上人が、この善導大師の教えを信じ浄土宗を開いた。一遍上人は浄土宗の一流、西山派の開祖、証空上人の孫弟子にあたる。

何故、一遍上人の始めた宗派を「時宗」と呼ぶのか。善導大師がその弟子たちを「時衆」と呼んだ。法然上人も証空上人も一遍上人もそれに従ったが、一日を六時（4時間ずつ）に分けて、仏前で念仏と六時礼賛というお勤めを行った。これを時間ごとに交代する。その人々を時の衆、「時衆」と呼んだ。この言葉は、一遍上

人の流れをくむ教団では今日まで使われていて「時衆」がこの教団の呼び名となった。徳川時代になって「時宗」と改められて宗派の名となり徳川幕府の庇護を受けたが、徳川の滅亡とともにマイナーな宗派となった。

時宗では、本尊として信仰する仏は阿弥陀仏、お称するのは「南無阿弥陀仏」。これを常に口にと覚えて仏と一体となり、阿弥陀仏のはかり知れない知恵と、限りない生命をこの身にいただき、安らかで喜びに満ちた毎日を送り、やがて清らかな仏の国（極楽浄土）へ生まれることを願うという教えである。（時宗寶歴、遊行寺発行）

一遍上人の遊行の記録は、「一遍聖絵」(国立博物館)のHPによって見られるが、画像が暗くあまり面白いものではない。また、ご上人は優れた歌人でその土地で詠った歌も多いが、私はどんな行程であったかのみに興味があったので、訪れた場所、寺院を中心とした。写真は無料画像によった。



ここで、一遍上人が遊行の旅に出るまでの経歴を見てみよう。1239 年、伊予国久米郡の豪族、河野道広の第 2 子。有力御家人であった本家の河野氏は承久の乱（1221）で京方に敗れる。祖父の河野通信が陸奥国の江刺（現岩手県北上市）に、伯父の河野通正が信濃国伊那に配流される。（一遍はいずれの土地を訪れている）

10 歳のとき出家、13 歳（1251）のとき太宰府に移り、法然の孫弟子の下で 10 年以上、浄土宗西山義を学ぶ。建長 4 年（1252）～弘長 3 年（1263）まで聖達の下で修学し、25 歳のとき父の死をきっかけに伊予に戻る。しかし、一族の所領争いが原因で、1271 年、32 歳で再び出家。長野の善光寺、伊予の窪寺で修行する。善光寺に参り、念仏一筋のほかに自分の道がないことを悟る。それから故郷の窪寺や岩屋寺にこもって念仏三昧生活を送り、ゆるぎのない信仰を確立する。この教えをすべての人々に広めようという念願を持ち、全国遊行に出る。時に文永 11 年（1279）2 月、一遍上人 36 歳、同行 3 人と伊予国を出立し、四天王寺、高野山を経て、夏の頃熊野本宮証誠殿に参籠し、熊野権現より啓示を受ける。この年、10 月には元は約 3 万の兵、約 900 隻の船に乗って、日本を襲った。（文永の役）

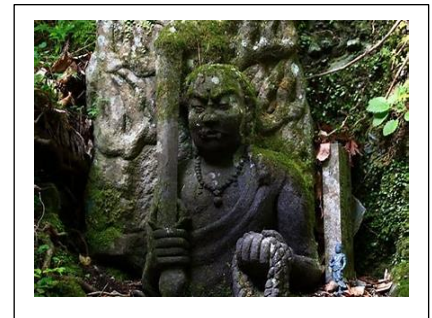
以後、信州・佐久では踊り念仏を始め、16 年間に殆ど日本国中を歩き、正応 2 年（1289）、神戸の真光寺で入滅、51 歳であった。その伝記は「一遍聖絵」（遊行寺蔵、国宝）に詳しい。



大宰府天満宮



善光寺



伊予の窪寺



遊行上人が巡り歩く所、必ず「御賦算」（お札くばり）がある。賦はくばる。算は念仏札のことである。この念仏札は遊行上人が集まった人々に一枚ずつ自ら配られる。一遍上人は生涯に 250 万人に配られたと「一遍聖絵」に言われている。逆 IVV のようなものですね。

念仏のお札に「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」書かれているのは 60 万人にお札を配ることを願い、また次の 60 万人の人たちに、ついにはすべての人々に（一切衆生）に配ることを念願したものである。現在、お札はお正月、遊行寺で配られている。



大隅正八幡宮



厳島神社



五条烏丸の因幡堂

建治元年（1275）37 歳、熊野を出て京をめぐり、秋のころ伊予国に戻る。翌 2 年、九州を遊行し、大隅正八幡宮に参詣。

弘安元年（1278）40 歳、夏、豊後国から伊予国に渡り、海岸沿いに松山あたりまで来て瀬戸内海の島々を通り抜けて、秋、厳島神社に参詣。冬、備前国藤井で吉備津宮の神主の子息らを教化。同国福岡の市で念仏をすすめる。備前国を後にした一行は山陽道を東へ。

弘安 2 年（1279）41 歳、春、上京して 8 月まで五条烏丸の因幡堂（いなばどう）に滞在、秋に信濃国善光寺に

赴くが、どのような道をたどって信濃路に入ったかはっきりしていない。信濃国へは承久の乱（1221）で配流され、この地で亡くなった叔父八郎通末、伯父四郎太郎通正の墓を訪れたと思われるので、京から東海道を西にとり、草津から知立あたりに出て、天竜川沿いに伊那谷を北上して長野に入ったと思われる。



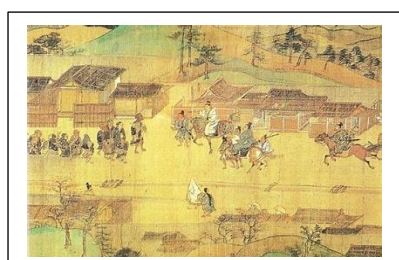
信州 小田切・跡部の踊り念仏 一遍上人初めて踊り念仏をする 奥州江刺、祖父河野通信の墳墓
国の無形重要文化財

善光寺あたりには2ヶ月あまり滞在するが、主として寺に詣でる人々に布教し、お札配りをしたようだ。

佐久郡小田切の里にある武士の館で民衆とともに念仏しているうちに、突然一遍が踊り出し、一同これにならって踊り廻った。これが踊り念仏の始まりであった。

弘安3年（1280）42歳、信濃追分、碓氷峠を越えて東国入り。板鼻、佐野、小野寺（現栃木県下都賀郡岩舟町）小山、宇都宮、喜連川、黒羽、下野国小野寺を経て、奥州江刺で祖父河野通信の墳墓に詣でる。（現北上市稲瀬町に聖塚として現存）、一遍上人と行動を共にした時衆は20人～30人程度）江刺を後にしたのは冬。その後、平泉、松島の辺りを遊行。

弘安4年（1281）43歳、海岸沿いの浜通りを南下して常陸国、武蔵国を遊行。常陸国のどこを通ったかははっきりしないが、武蔵国石浜（現東京都台東区橋場、奥州街道の終点） この年、日本史上**弘安の役**。



鎌倉入りを制止される巨福坂



片瀬での踊り念仏



片瀬の踊り念仏跡

弘安5年（1282）44歳、2月下旬、府中から多摩川を渡り、ながさご（長後のことらしい）を経て鎌倉に入るのだが、3月1日、巨福呂が谷で鎌倉武士に鎌倉入りを阻止される。やむなく翌2日、手広を抜けて片瀬の地藏堂に仮設の2間に4間ほどの踊り屋を建てる。しかもこの踊り屋には屋根もあれば、床は周囲の見物人の席より一段高く作られている。床の上では一遍を始め数人の時衆、中には尼僧もいて、太鼓と鐘を叩いて合掌しながら念仏をとなえ、足をあげ床を踏みならし、円陣を組みながら、ぐるぐると回り踊っている。佐久での自然発生的に行われた踊り念仏に比べると、三年ばかりの間に見せるための踊り念仏になっていた。一遍上人の16年間にわたる遊行期間中、半年近くも1ヵ所に滞在したのはここだけである。片瀬に集まって来たのは一般の庶民ばかりではなく、武士や貴人らしい人物も聖絵に描かれている。東大の松岡教授は、鎌倉幕府に抵抗する一遍の見たさ、脚を上げて踊る尼僧の姿見たさに集まってきた男ども、一遍は偉大なる宣伝マンであったと述べている。この片瀬御堂の布教で賦算（お札配り）60万人を達成したと言われる。

7月16日、片瀬をあとにした一遍上人らは、当時、もろこしが原と呼ばれていた茅ヶ崎から平塚にかけての海岸沿いの野原を通り、箱根の山を越えて伊豆国の三島に向かった。この頃、箱根を越えるのに足柄・箱根の両道があったが、鎌倉時代になると箱根道が一般的になった。小田原から湯本に出て、ここから芦の湯を過ぎ、芦ノ湖南岸の芦川宿から大崩峠を越えて伊豆国に入った。三島に入ったのは10月であった。



尾張国 甚目寺



菅津神社



大津 関寺

弘安6年(1283)45歳、東海道を西に天龍川を越えて三河国に入り、秋のころ尾張国の甚目寺に着いた。萱津宿に至る。萱津宿は京都から鈴鹿峠を越え、伊勢路を経て尾張国に入り津島を通る旧東海道と美濃国関ヶ原を経て萱津に至る新東海道の合流点近くにあった宿場町で栄えて所である。その後、尾張国、美濃国、近江国に入り草津に止住した。大津の関寺では2週間滞在し踊り念仏を行った。

弘安7年(1284)46歳、関寺から入京し、四条京極釈迦堂に入る。その後、烏丸松原の因幡堂、鴨川の東、三条の北にあった悲田院、蓮田院、雲居寺、六波羅蜜寺、市屋道場を遊行し、5月22日市屋道場を発ち桂に移る。ここで一遍上人は病にかかり三か月ばかり滞在した。



京尾道場での踊り念仏



四条京極釈迦堂



烏丸因幡堂



蓮田院



悲田院



雲居寺

弘安8年(1285)47歳、保津川・由良川沿いを北上して、5月、丹後国久美浜、但馬国から因幡国を経て伯耆国に入ったところで冬に入った。おおさか(現在の鳥取県日野郡溝口町大坂)、古代・中世の大和国と出雲国を結んでいたのが出雲路。この出雲路をたどり、大山山麓の西を流れる日野川に沿って上り、峠を越えれば美作国である。美作国の一宮中山神社に参詣。

弘安9年(1286)48歳、摂津国に出てふたたび四天王寺に参詣。住吉大社(現大阪市住吉区住吉)を経て河内国磯長の聖徳太子の廟に詣でる。そののち、大和国当麻寺へ。冬、山城国の石清水八幡宮(現・京都府八幡市)に詣でたのち、播磨国を遊行、印南野の教信寺に参詣。

(この年、2度目の蒙古来襲、弘安の役、14万もの兵が4400隻の船に乗って来襲。元寇)



美作国一宮中山神社



大阪 住吉大社



河内磯長、聖徳太子廟

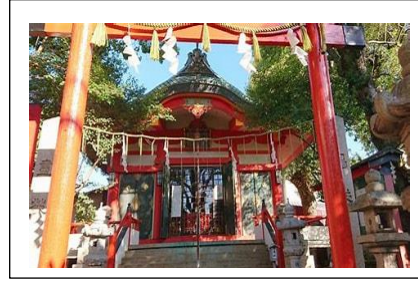
弘安 10 年 (1287) 49 歳、春、西の比叡山ともいわれる播磨国書写山に参詣したのち、松原八幡宮 (姫路市白浜町) へ。この年、備後国一宮吉備神社に参詣。秋、安芸国一宮厳島神社に詣でる・

正応元年 (1288) 50 歳、伊予国に渡り、菅生の岩屋を巡礼し、繁多寺に詣で、12 月 16 日、大三島神社に参詣。

正応 2 年 (1289) 51 歳、この年の始め讃岐国に赴き、善通寺・茶羅寺に参詣。阿波国に移り、7 月 18 日、福良から摂津国明石の浦に至り、さらに兵庫におもむき観音堂に入る。8 月 23 日禅定に入るがごとく入滅する。



播磨国 書写山



姫路松原八幡宮



備後国一宮吉備神社



松山 繁多寺



善通寺 茶羅神社



一遍上人 入滅 巻 1 2

参考：鎌倉時代末期の時代背景 民衆的な仏教の高まり。

鎌倉時代、二度にわたる元の襲来があった。一度目は文永 11 年 (1274) に約 3 万の兵が 900 隻に船に乗って襲ってきた。対馬、壱岐を占領して、九州北部の博多湾に上陸し、これらを迎え撃つ幕府軍を苦しめた。日本側の抵抗も強く、元軍は日没とともに船を引き返し、その夜の突然起こった暴風雨にあって退却した。2 度目は弘安 4 年 (1281) に 14 万もの兵が 4400 隻の船に乗って、九州北部に迫った。しかし、博多湾に石塁を築くなどして防備があった上、十分な準備をした日本の武士が勇戦し元軍の上陸を阻んだ。日本側は夜陰に乗じて火をつけて海上にとどまっているとき、再び暴風雨が元は軍勢の 4 分の 3 を失った。一方、日本側も無事に帰った者は 3 万人にも満たなかった。二度にわたる元の襲来を**元寇**と言っている。

元寇は、幕府を支える御家人に、多くの犠牲を払わせた。しかし、外国との戦いであったために、新しい土地を没収したわけではなく、幕府は十分な恩賞を与えることが出来なかった。それによって幕府は、御家人たちの信頼

を失うことになり、鎌倉幕府の支配は、かげりを見せ始めた。

12世紀には、仏教が狭い貴族に世界から広がりを見せ、下級武士や庶民たちの間に伝わっていた。浄土宗を開いた法然は、平安時代に貴族の間で広まっていた浄土教を徹底し、念仏を唱えさえすれば、誰でも極楽浄土が約束されると説いた。さらに弟子の親鸞は、法然の教を発展させ、罪深い悪人こそ、阿弥陀仏が救おうとしている人々であるとして、浄土真宗（一向宗）を広めた。一世代あとの一遍も、念仏を唱えるだけで、すべての人々が救われると説き、時宗を開いて、諸国をめぐり、踊念仏を行った。一方、日蓮は、法華經に基づき、題目（南無妙法蓮華經）さえ唱えれば、そのまま仏になれるし、国家も救われると説いて、日蓮宗（法華宗）を開いた。

また宋に渡った栄西や道元は禅宗を伝え、栄西は日本の臨済宗を、道元は曹洞宗を開いた。念仏や法華信仰が庶民や地方武士の支持を受けたのに対して、禅宗は宋から伝来し、知識人の間に広まった宗教であった。禅宗は、ひたすら座禅することによって、悟りを得ようとする教えである。鎌倉では2代将軍頼家や北条政子が支持して、鎌倉武士たちの間に広まった。このような新しい仏教の動きに対して、天台宗や真言宗などの旧仏教も、改めて戒律を重んじ、勢力の引き締め努力した。（このパラ。新しい歴史図書 扶桑社より抜粋）

参考・引用図書

「藤沢と遊行寺」 高野 修 藤沢市史ブックレット2。 「時宗宝暦」 遊行寺

「一遍聖絵」 聖 戒編 大橋俊雄 校注 岩波文庫

「一遍と時宗教団」 大橋俊雄 教育社歴史図書 画像はすべて無料画像を使用。